

「狂言」ビデオ鑑賞はいかがでしたか！

11月も後半に入りました。まもなく師走です。

ことぶき大学の皆さん、この三連休いかがお過ごしでしたか。冬の準備は終わりましたか。私はいつもより余裕をもってできたように感じています。

それにしても、ウイルス感染拡大が急増してます。何としても感染予防に心掛けるしかありません。マスク・うがい・手洗い・睡眠・栄養・保温・三密・ソーシャルディスタンスです。

気を引き締めて当たり前のことをしましょう……笑顔も忘れないでください。

さて、今回は野村万作、萬斎の狂言を鑑賞しました。いかがでしたか。

私ことですが、小さい頃、旭川の上川神社周辺が行動範囲でした。夏は崖登りと蝉取り、冬はスキー……どちらも私たちは「開拓」と言っていましたが、その上川神社の境内には今でいう能楽堂のようなものがあつたと記憶しています。しかし、調べてみると平成4年「神楽殿・舞殿」が創祀100年事業として建設されたと記されていました。でも、平成4年は私が39歳ですから小さい頃ではありません。……でも覚えているのです……「ここで何をやるのかなーて」……

「能楽」とは本来、狂言と能と一緒に上演されることが多く、能→狂言→能→狂言というように交互に上演されることになっているそうです。「厳格な能」と「庶民の笑いを誘う狂言」…何となくその理由がわかるような気がします。狂言が面白い！！でも生の舞台を観たくなりますね。ウイルス感染が終息したら、皆さんと一緒に東京の国立能楽堂での観劇もいいですね。私は少しだけ東京に憧れています。

東京の千駄ヶ谷にこの国立能楽堂があるとのこと。趣きがあります。

なお、今後、「鏡冠者」「節分」「髭櫓かけり入り」、「鷹姫（能）」+「檜山節考（狂言）」でひとまず今年度の狂言の学習を終えたいと思っています。来年度も古典芸能の魅力を深めていきたいと思っています。



Today's Schedule

令和2年11月25日（水）

本日も午前授業になります。三連休後ですので、感染拡大が広がることへの不安も大きくなります。でも、感染予防対策をしっかりとって今日一日も楽しく学びましょう。

8時45分 当番：第2研究生

9時15分 朝の集い 校歌斉唱（小声で）

10時00分 食育講座 1

講師：上井 富美枝（かみい ふみえ）さん

12時00分 終了 後片付け

東山バス発

昨年も綴りに書いたことがありました。

「～世の中は、面倒くさいことをなくして便利になってきました。手間がかかってしかたがなかったものを新しい方法を発明して改善する。その繰り返しで世の流れができています。ところが、便利なものとは諸刃の剣。便利なものを使えば使うほど楽しみがこぼれていくことも、そろそろ気づいたほうがいい気がします…後略（松浦弥太郎著「今日もていねいに」から）

今日は、楽しく食育講座で学んでみましょう。ちょっとしたことで体が温まる、体が温まることで心も温まるものです。ちょっと手間をかけることで生活もより豊かになるものです。

NEXT SCHEDULE

令和2年12月9日(水曜日)

～ことぶき大学作品展示作業～

8時45分 当番：本科1年、本科2年
9時15分 朝の集い 校歌斉唱
10時00分 「クラブ学習 ⑤」
12時00分 終了・後片付け
東山バス発

本日、**クラブ展示作業**を行います。

作品展示作業は30分程度で終わりますので、ご協力をお願いします。

なお、本日から16日(水曜日)までの一週間の予定です。

9日のクラブ学習の時間ですが、作品展示が9日から来週16日(水曜日)まで開催します。クラブによっては作品が間に合わないものもあるかも知れませんが、ことぶき大学が再開した7月後半から現在4か月間での作品展示を開催します。すでに作品がそろったクラブにつきましては午前中から展示作業を進めてください。

事務局ではことぶき大学の学習の様子を写真のパネルとして、また、ことぶき通信の一部を拡大して掲示する予定です。コロナウイルス感染拡大の中ですが、間接的なコミュニケーションの場としての作品展示を開催したいと思っています。

どうか、各クラブで協力しながら展示作業を進めてください。また、一週間の展示期間ではありますが、少人数でお友達を誘って会場に足を運んでください。

茶道・書道クラブ訪問



かつて日本史に興味を持ったときがあります。それは「信長」という人物からでした。その中で「信長と茶」～「千利休～秀吉」「光秀～細ガラシア～三浦綾子」……どんどん興味や世界が広がっていきました。

「小説・千利休(童門冬二著)」の中にこんな一文がありました。

『「一期一会」…しかし茶道では、そんな型にはまった考えではなく「毎日顔を合わせている馴染みの人間でもその日はじめてあったときは生まれてはじめてこの人に会った」と思い、また用が済んで別れを告げる時はもうこの人とは二度と会えない、と思う気持ちで出合いを大切にする」ということだ。

だから茶室内で、亭主と客が遭遇し亭主が茶を点(た)てるときは、「心の限り奉仕精神を尽くす」ということである。また茶を受けた客の方が、「結構なお点前でした」と礼を言うのはこれもまた「亭主の奉仕に対する精一杯の感謝の気持ち」を表す行為である。したがって、両者の間に凄まじい緊張感が生まれ奉仕と感謝の念が宙で激突する。その緊張感を利休は、狭い茶室で表したかったのだ。(略)彼が「侘び」と称して…(後略)』

この小説・千利休の中では、お茶を通して信長の政治、経済、芸術文化があった。

それを秀吉がどう繋げたのか、利用したのか、そして、利休の自決に至ったのかが書かれています。小説ということですが晩秋の夜長に再読するのもいいですね。「まちびと」…

千利休は自分をそう呼んでいます。

まちびと=市民ということです。

……ますます奥が深そうですね。



先日、インターシップで高校生が体験学習として茶道を学びました。茶道に触れるということは、おもてなしの心を学ぶということです。礼儀や作法など古風とはいえ、日本人が忘れかけていたもの、目に見えない本当に大切なものがそこにあるのではないのでしょうか。講師の岡田先生が丁寧に指導されている姿を見てそう感じました。感動しました。

茶道の世界、それは「侘び、寂」の世界の触れるということですよ…



「書の世界」、それは私の母の世界でもありました。一周忌はこのコロナウイルス感染予防で自粛、妻と私だけの法要となりました。



実家の私の部屋の本棚、右側の一段目には母の愛用した書道の道具があります。母の雅号は「綾園（りょうえん）」、薬剤師だった母は家庭の主婦だけではありませんでした。仕事から帰ってきて主婦をして、夜中、また休日でも時間があれば書いていました。いろいろな師範認定を持ちながらも、後半は墨で絵を描いていた記憶が残っています。

「書道は一生できるものだから書を学びなさい」と小さい頃から言われていたものです。



書を書くときは神経を集中します。無心になるときのなのかも知れません。自分だけの時間、自分一人の時間、孤独の時間、自分に向き合う時間とも言えると思います。



でも、それは寂しい時間ではありません…

書道クラブの時間、その空間には何かしら緊張感、張り詰めた空気感のような、現実と過去との出会いというのでしょうか……



「書の楽しさの第一は、書の古典に相對して、微妙な筆の動きに表された作者の心に触れ、その作者が生きた時代に想いを馳せることにあります」



この言葉にあるように、書を通し、歴史や文化、時代背景、その時代の人との出会いがあることです。

書道でも茶道でも陶芸でも絵手紙でも切り絵でも、それらを通して新しい人との出会いを求めていることであり、新しい自分を見つめることに通じるものではないのでしょうか。

より美しい作品を作り出したいと願う気持ちは、より美しく生きたいと願う自然な欲求の表れでもあります。



人生で何か一つ自分の趣味を見つけることができれば、そこには無限に広がる「学びの世界」があり、それは「より豊かな人生」に通じるということでのなのでしょう…

…

「写真を撮る」

先日、強い霜が降りました。早速カメラを持って外に出ました。寒いけど新鮮な空気、思いっきり深呼吸……いい感じです。

それで撮ったのが下の写真です。真ん中の庭の写真は別な日のものですが、晩秋を迎えた今、そして霜が降りた一枚の枯葉を見て思い出しました。

皆さんご存知「最後の葉」O.ヘンリーの作品です。 ちょっとご紹介します……

「古びたアパートに暮らす画家のジョンジーと同じ画家のスー。貧しいながら暖かい生活を送っていた中、ある日ジョンジーは重い肺炎を患ってしまう。スーは医者から「ジョンジーは生きる気力を失っている。このままでは彼女が助かる可能性は十に一つ」と告げられる。心身ともに疲れ切り、人生に半ば投げやりになっていたジョンジーは、窓の外に見える煉瓦の壁を這う枯れかけた蔦の葉を数え、「あの葉がすべて落ちたら、自分も死ぬ」とスーに言い出すようになる…彼女たちの階下に住む老画家のベアマンは、口ではいつか傑作を描いてみせると豪語しつつも久しく絵筆を握らず、酒を飲んで他人を嘲笑う日々を過ごしていた。ジョンジーが「葉が落ちたら死ぬ」と思い込んでいることを伝え聞いたベアマンは「馬鹿げてる」と罵った。その夜、一晩中激しい風雨が吹き荒れ、朝には蔦の葉は最後の一枚になっていた。その次の夜にも激しい風雨が吹きつけるが、しかし翌朝になっても最後の一枚となった葉が壁にとどまっているのを見て、ジョンジーは自分の思いを改め、生きる気力を取り戻す。最後に残った葉はベアマンが嵐の中、煉瓦の壁に絵筆で精緻に描いたものだった。ジョンジーは奇跡的に全快を果たすが、冷たい風雨に打たれつつ夜を徹して壁に葉を描いたベアマンは、その2日後に肺炎で亡くなる。真相を悟ったスーは物語の締めくくりで、あの最後の葉こそ、ベアマンがいつか描いてみせると言い続けていた傑作であったのだと評する。



作家の O.ヘンリーの短編集では、「賢者の贈り物」「二十年後」なども有名です。47歳で亡くなった彼の生き方、生涯は波乱の連続だったようです。

ということで、雪解けから春、夏、秋、晩秋と手入れをしていた庭の草木たち…そして生涯を終えた枯葉の一枚一枚… シャンソンの枯葉を調べていると、フランスの詩人で作家で批評家のレミ・ド・グールモンの『秋』と題した文章に出会いました。

「秋の葉は最後の花ではないだろうか？ 葉はそのためにだけ落ちるのだろう。人に拾ってもらい、大切にもらい、愛されるために。私は枯葉をそのままにした。葉には残酷なこと、そして私自身にとっても残酷なことだ。私には秋の思い出が必要ではないのだ。秋は私の心の中にいるのだから」

そんな意味深なことばも思い出しつつ…一枚一枚霜が降りた落葉を撮影しました。自然は美しい！！

まもなく長い冬を迎えます。 ことぶき大学の皆さんとともに良い年末を迎えましょう！！